

第25回大学教育研究フォーラム

2年半の追跡調査に基づくアサーティブプログラム・アサーティブ入試の現状と課題
—多面的な評価に基づく選抜の効果とは—

アサーティブ入試の 成果と課題

— 3時点のパネルデータ分析から —

2019年3月23日（土）

ベネッセ教育総合研究所

木村 治生

● 我が国の高等教育の課題

★ 「大学はきちんと学生を教育しているのか」という問い

- ・ 社会から大学に対する批判的なまなざし（金子2016）
- ・ 大学生の学修時間の短さ（国立教育政策研究所2016）
- ・ 職業的レリバンスの低さ（本田2005）

● 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（2018年中教審答申）

★ 学修者本位の教育への転換と質保証の明示

高等教育機関には「学修の成果を学修者が実感できる教育」を行い、そのような教育が実現できているかについて確認できる「質の保証の在り方」が求められる

● 「どう可視化するか」と「どう使うか」の2つが必要

★ 単に可視化するだけでなく、データをどう活用するかが重要

- ・ 量的調査は組織間比較がしやすく、付加価値分析が可能という強みを持つが、学生の学修成果をどれだけ可視化しているのかを問う必要がある（松下2017）

● 大学の個別性と共通性

★ 大学ごとに質保証の制度設計が必要

- ・ 同じ施策であっても、それが成長に与える効果は、大学により異なる

★ 測定内容・方法や質保証の仕組みを共通化することも必要

- ・ 質保証（＝教育改善）を可能とする方法論の開発が求められる

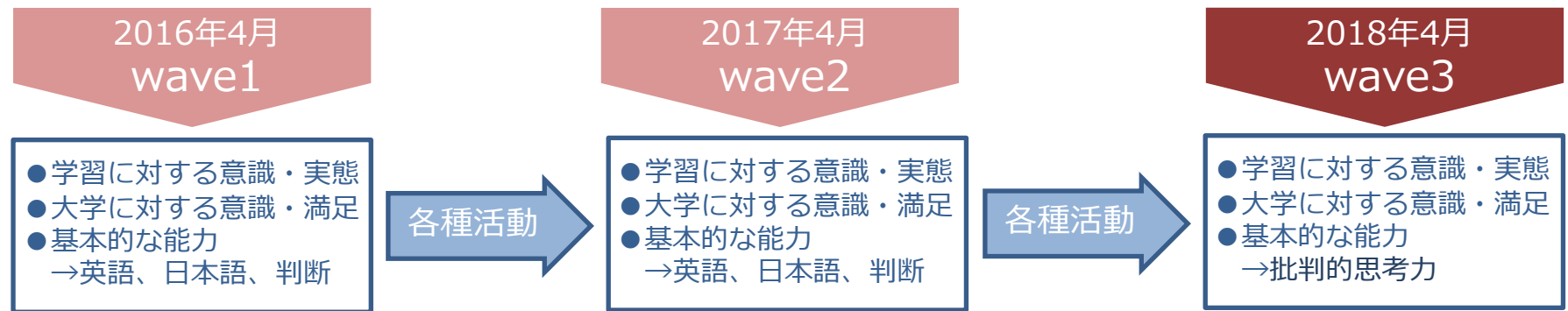
【研究の目的】

特定の入試・教育形態（アサーティブ入試）が、大学生の学習や成果にどのような影響を与えているのかを数値で可視化する。

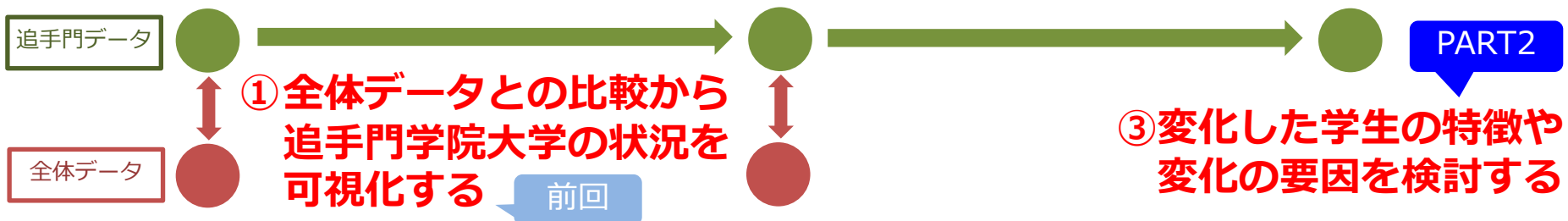
【使用データ】

ベネッセi-キャリアが実施する「大学生基礎力レポート」ⅠおよびⅡ
<https://www.benesse-i-career.co.jp/univ/service/#sv-report1>

【分析枠組み】



② 3時点の学生の変化（成長）を可視化する PART1



● 学部別サンプル数

	2016年	2017年	2018年	継続 パネル	残存率
	1年次	2年次	3年次		
心理学部	221	168	111	102	46.2
経済学部	305	264	188	178	58.4
経営学部	446	297	223	190	42.6
社会学部	234	152	83	78	33.3
国際教養学部	235	131	47	43	18.3
地域創造学部	151	125	83	79	52.3
合計	1592	1137	735	670	42.1

● 学科別サンプル数

	2016年	2017年	2018年	継続 パネル	残存率
	1年次	2年次	3年次		
心理学科	221	168	111	102	46.2
経済学科	305	264	188	178	58.4
経営学科	223	172	122	109	48.9
マーケ学科	223	125	101	81	36.3
社会学科	234	152	83	78	33.3
アジア学科	99	49	29	26	26.3
国際教養学科	136	82	18	17	12.5
地域創造学科	151	125	83	79	52.3
合計	1592	1137	735	670	42.1

● 入試区分別サンプル数

	2016年	2017年	2018年	継続 パネル	残存率
	1年次	2年次	3年次		
一般入試	331	228	160	142	42.9
推薦（指定校）	414	309	182	169	40.8
推薦（付属）	64	40	23	21	32.8
推薦（一般・公募）	412	309	213	204	49.5
推薦（その他）	191	141	90	75	39.3
アサーティブ	126	78	52	45	35.7
センター試験利用	11	9	7	6	54.5
留学生	25	23	8	8	32.0
その他・不明	18	0	0	0	0.0
合計	1592	1137	735	670	42.1

次ページ以下の分析では、6つの入試区分の違いに注目する

- 一般入試
- 推薦（指定校）
- 推薦（付属）
- 推薦（一般・公募）
- 推薦（その他）
- アサーティブ

※学部・学科について、WAVE1とWAVE3で異なるケース（転部・転科等の可能性）については、パネルデータではWAVE3の所属とした。

PART 1

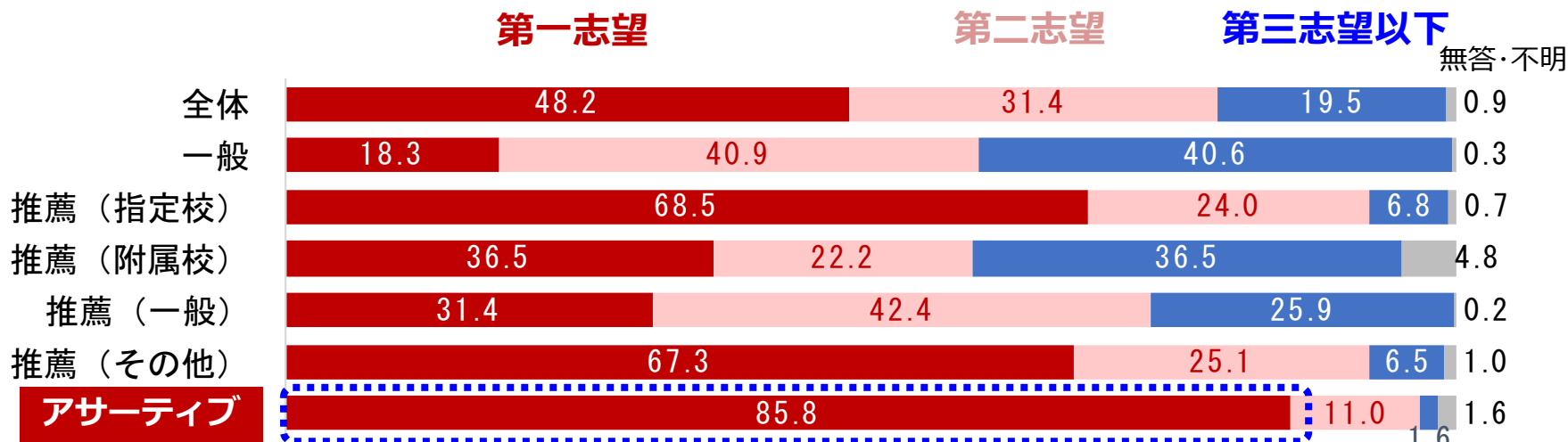
3 時点分析

- 以下の分析では、Wave 1、2、3すべての時点で回答した学生のデータ（パネルデータ）を扱っている。入試区分別に見たとき、数値がどのように変化しているかを確認する。

●アサーティブ生は、9割が「第一志望」で入学

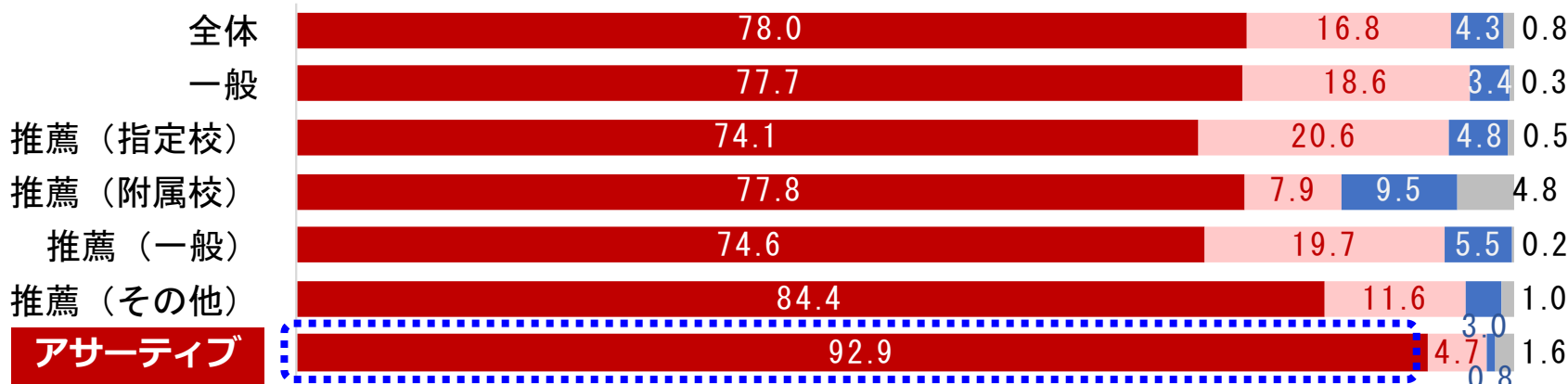
大学志望度

学部・学科志望度



85.8%

p.<0.001(カイ二乗)



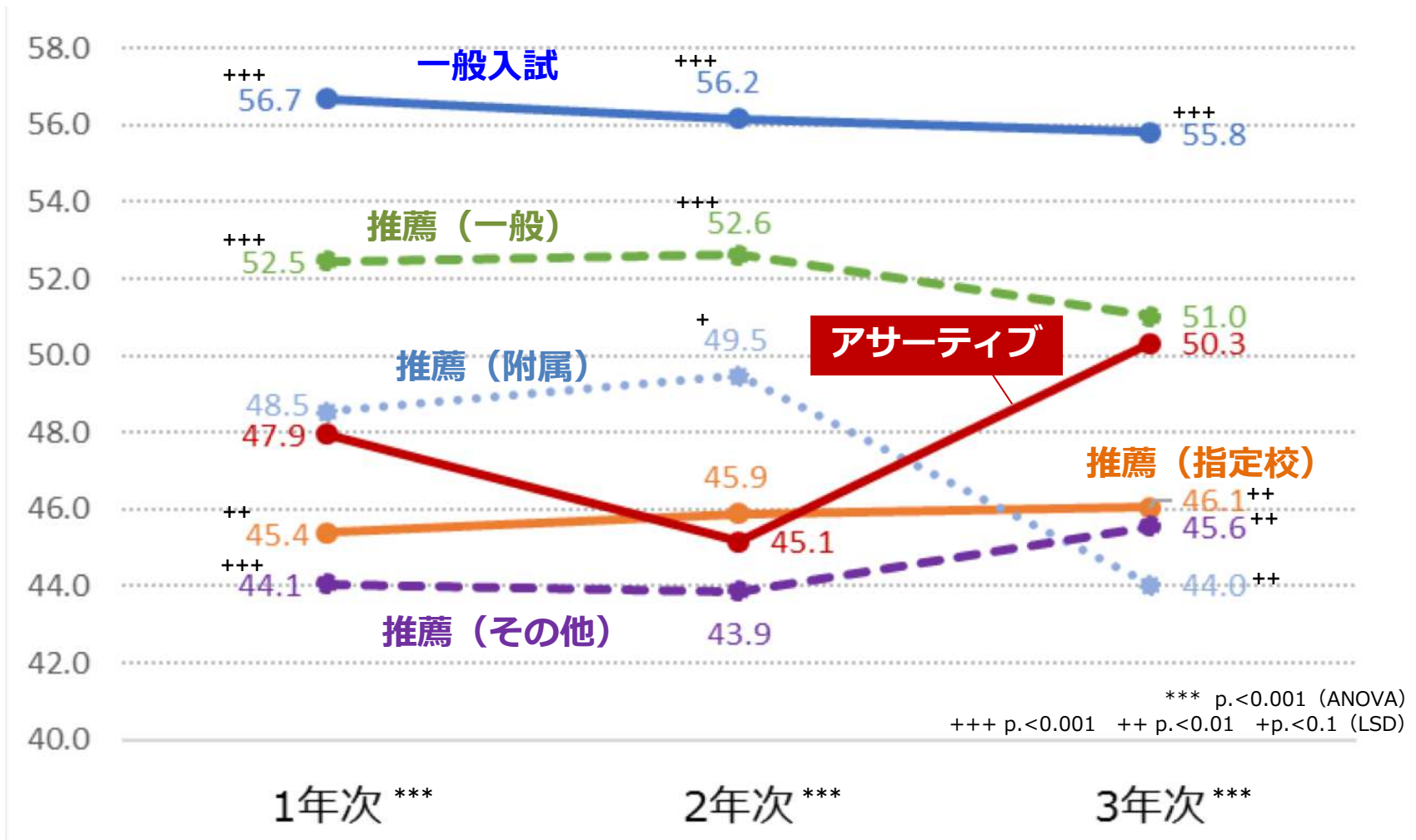
92.9%

p.<0.001(カイ二乗)

*母数は1年次1592名。

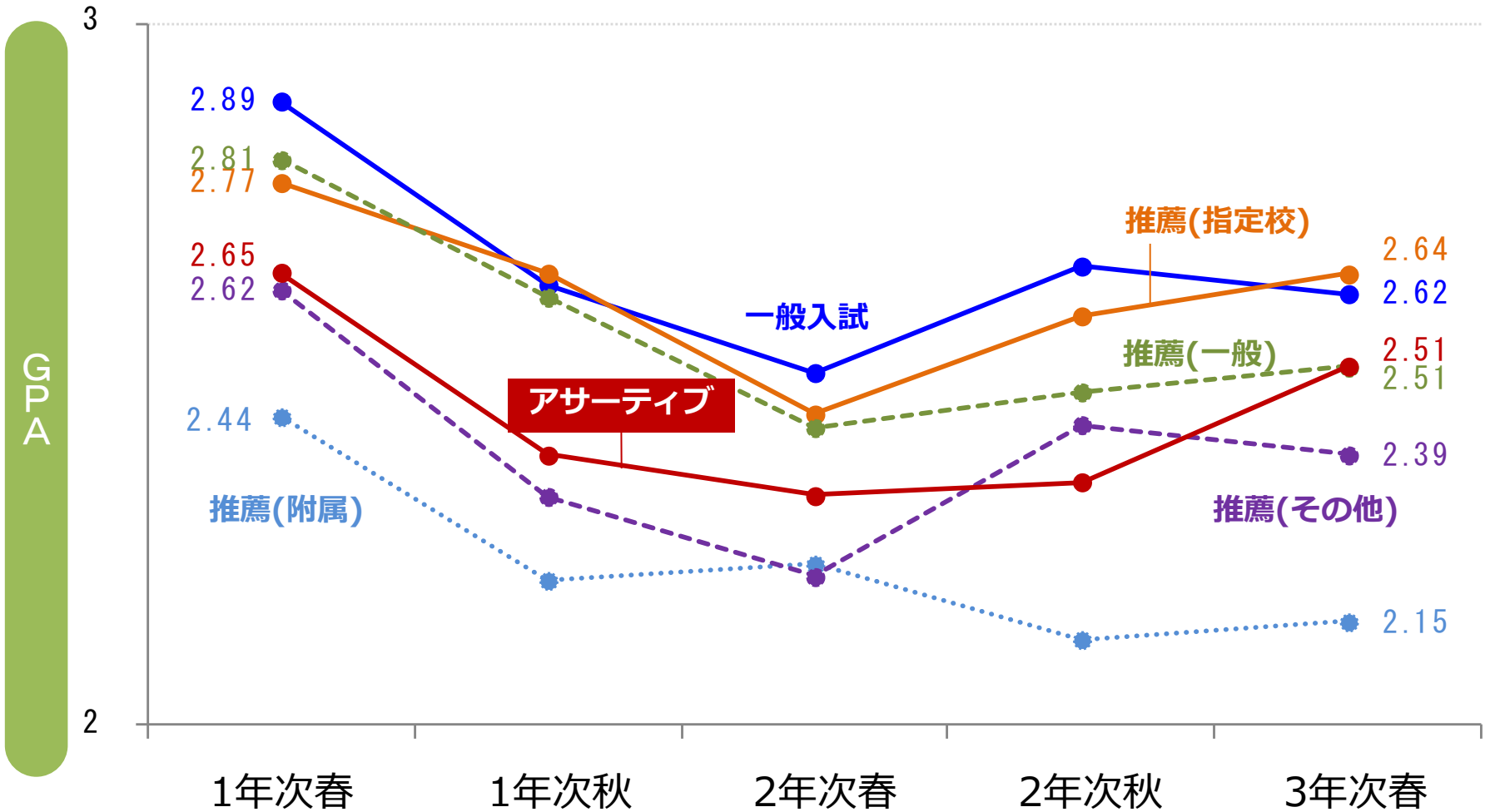
● アセスメントは、1→2年次に低下、2→3年次に上昇

学内偏差値

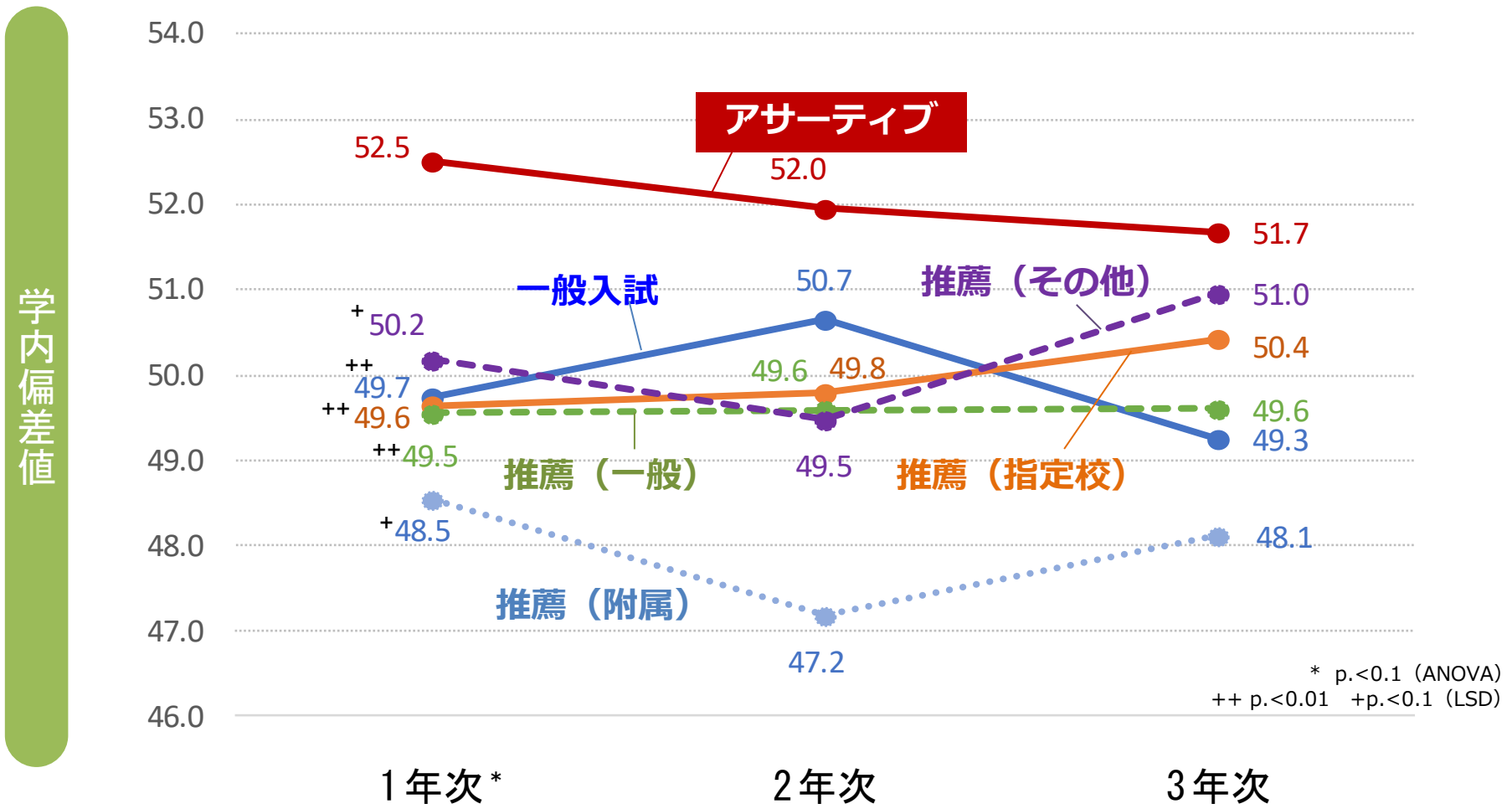


* 1年次と2年次は「基礎学力」、3年次は「批判的思考力」を測定。各調査での得点を偏差値に換算した。
 * 多重比較 (LSD) は、「アサーティブ」との差の検定結果のみを示した。(次ページ以下同様)

● 2年次秋→3年次春にかけて成績（GPA）が上昇



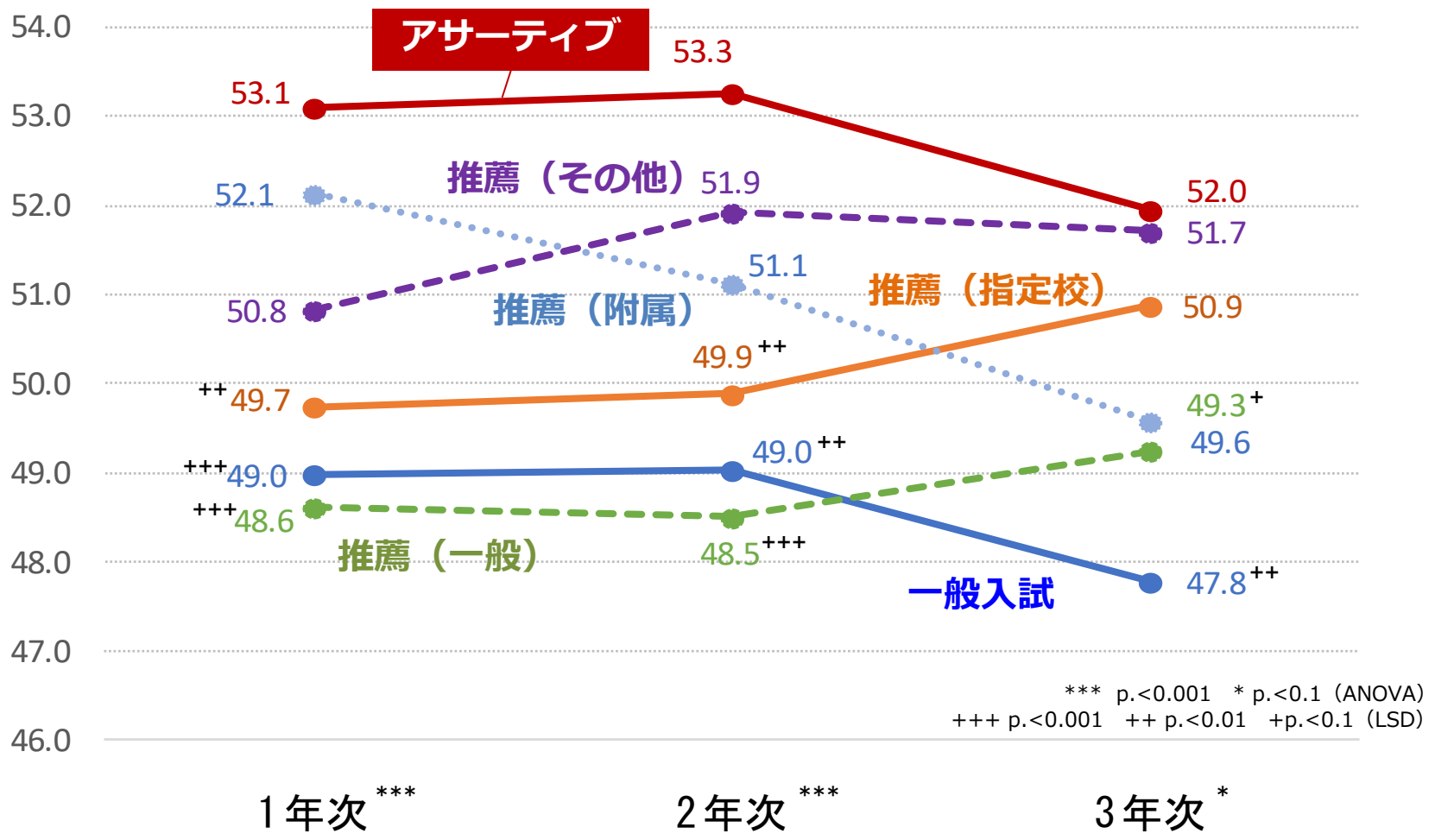
● 高い水準をキープし、学びに前向きな意識をもつ



* 「大学で学ぶ価値」「学びへのコミット」「学びへの心構え」「学びの見通し」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

● 継続して高い意識をもち、行動できている

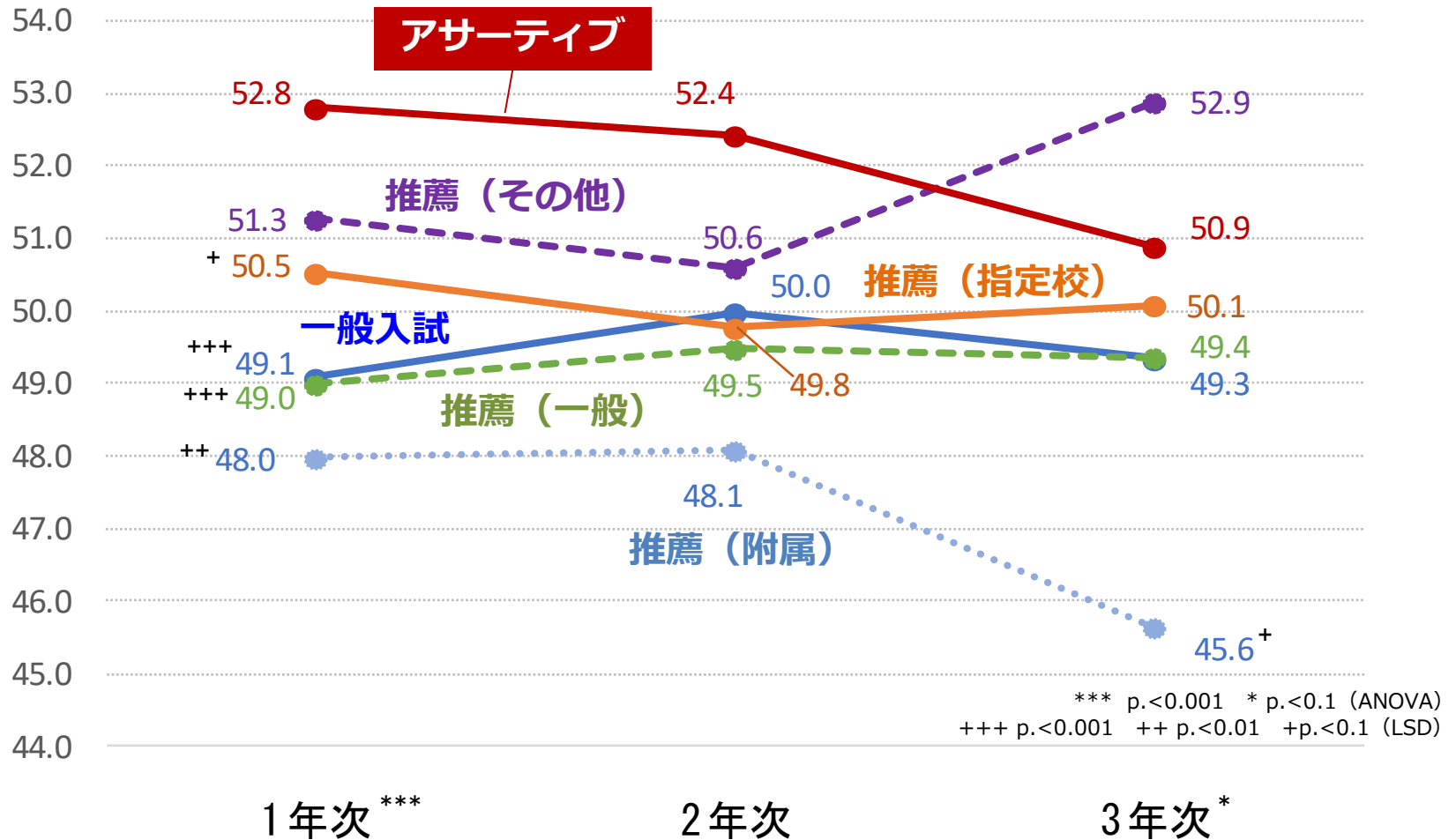
学内偏差値



* 「自己理解」「社会理解」「進路の明確度」「進路実現に向けた行動」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

● 1～2年次は高い水準だが、3年次は低下傾向

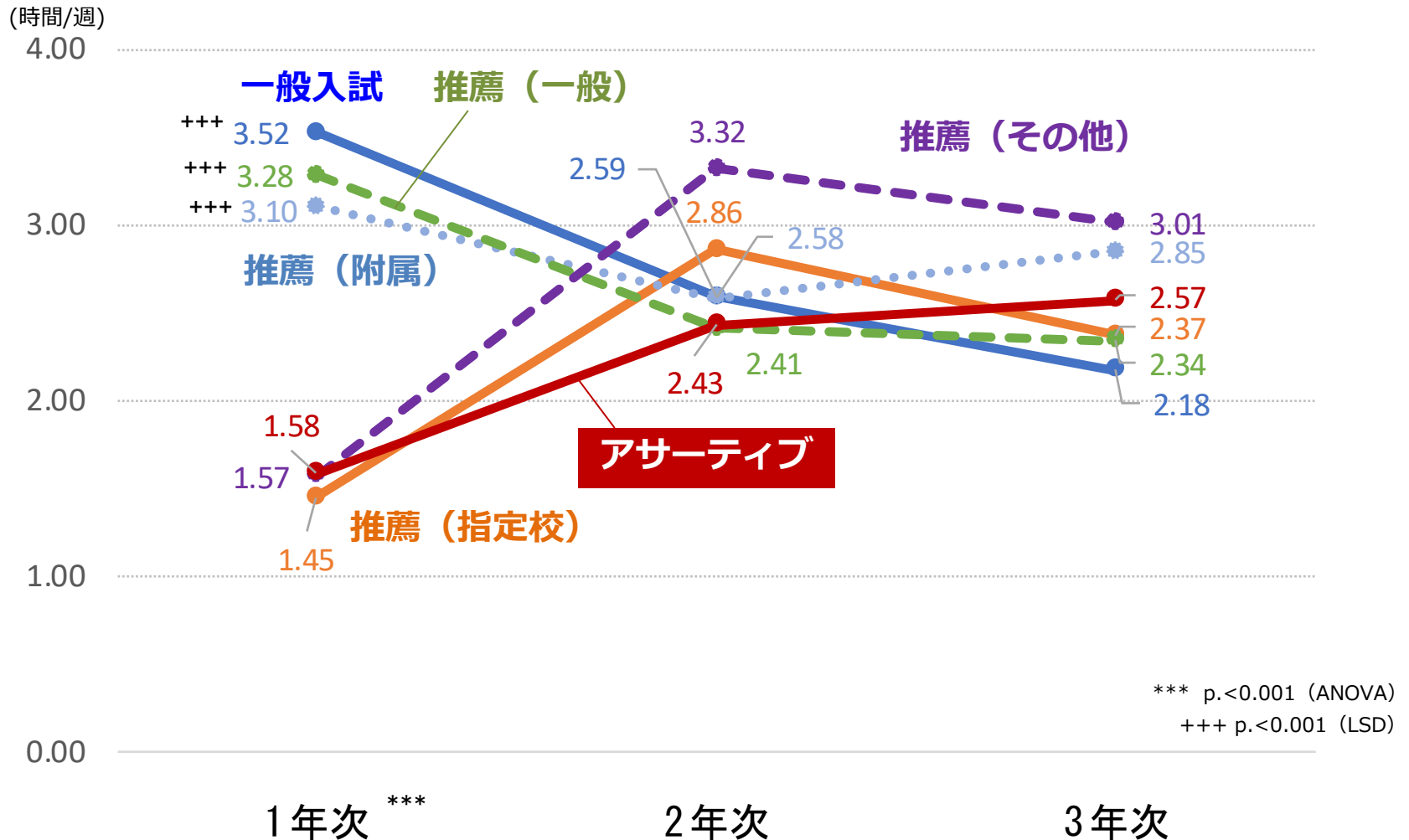
学内偏差値



* 「挑戦する力」「続ける力」「ストレスに対処する力」「多様性を受容する力」「関係性を築く力」「議論する力」「課題を設定する力」「解決策の立案」「実証・検証する力」に関する27項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

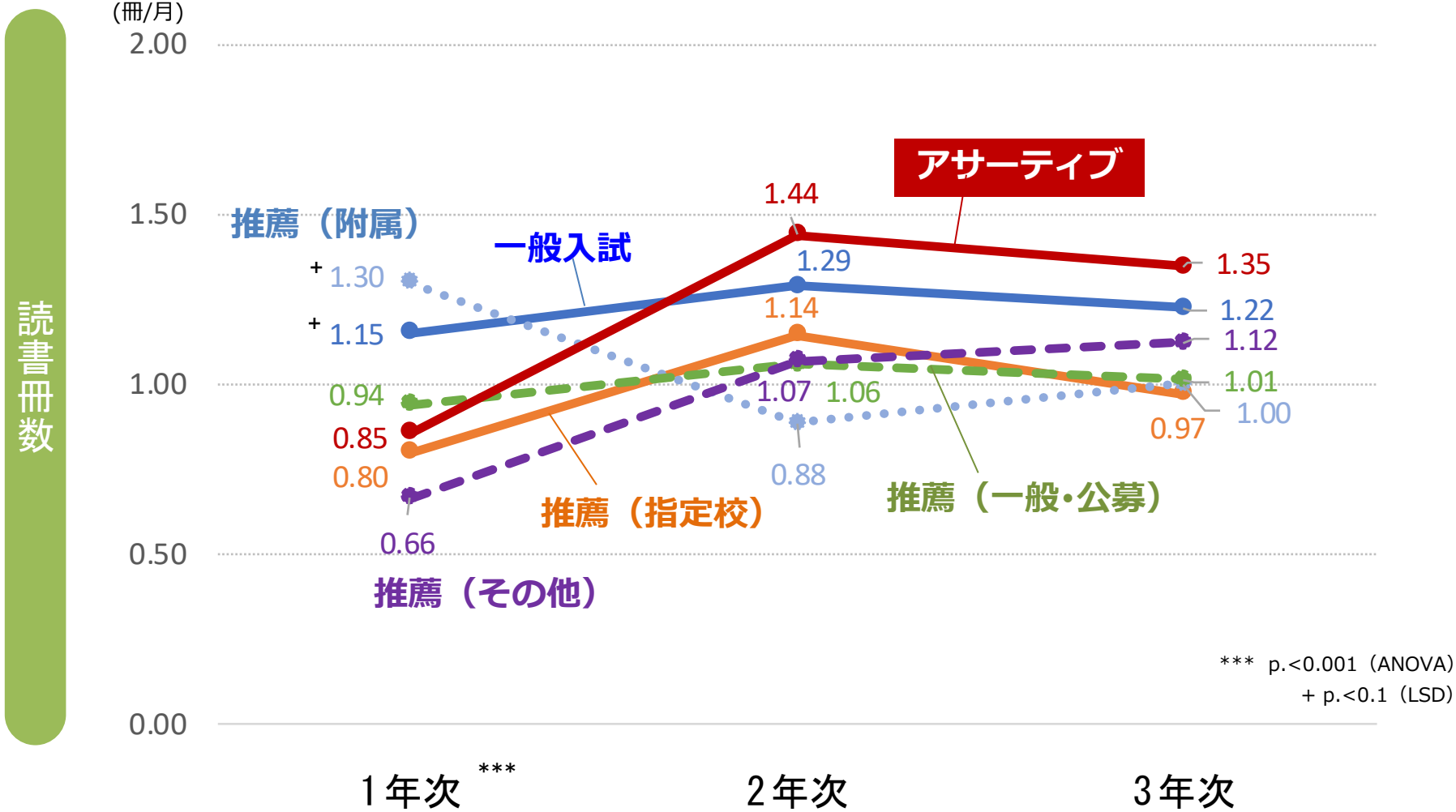
● 1年次に短かった自習時間は、全学平均レベルに増加

自習時間



* 週あたりの授業以外の自習時間について、「10時間以上」を15時間、「7～10時間」を8.5時間、「5～7時間」を6時間…のように数値に置き換えて、平均値を算出した。

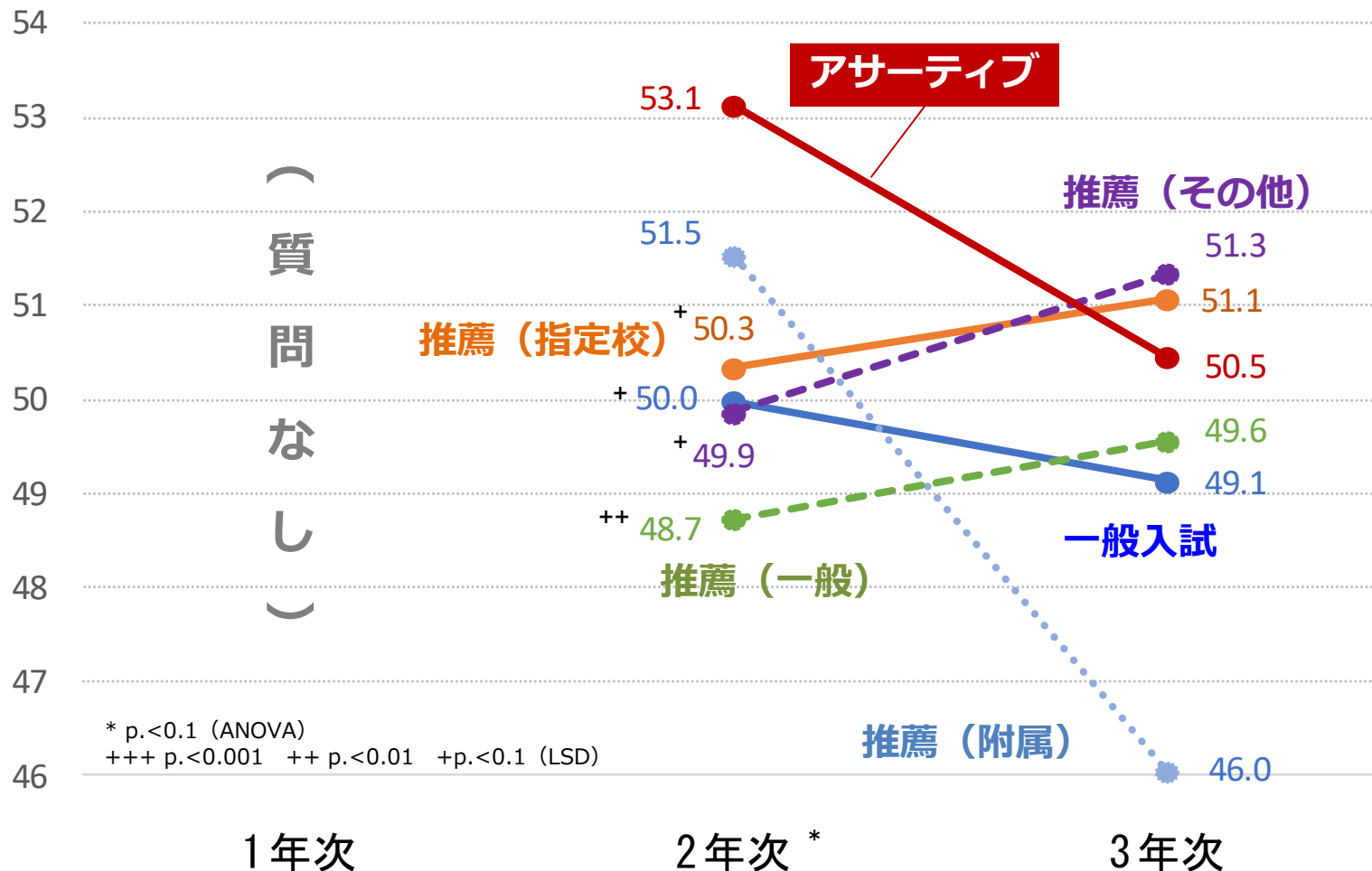
● 1年次に平均レベルだった読書冊数は、トップの水準に



* 月当たりの読書冊数について、「4冊以上」を5冊、「2~3冊」を2.5冊、「1冊くらい」を1冊、「ほとんど読まない」を0冊に置き換えて、平均値を算出した。

● 2年次は高いが、3年次は全学と同等のレベルに低下

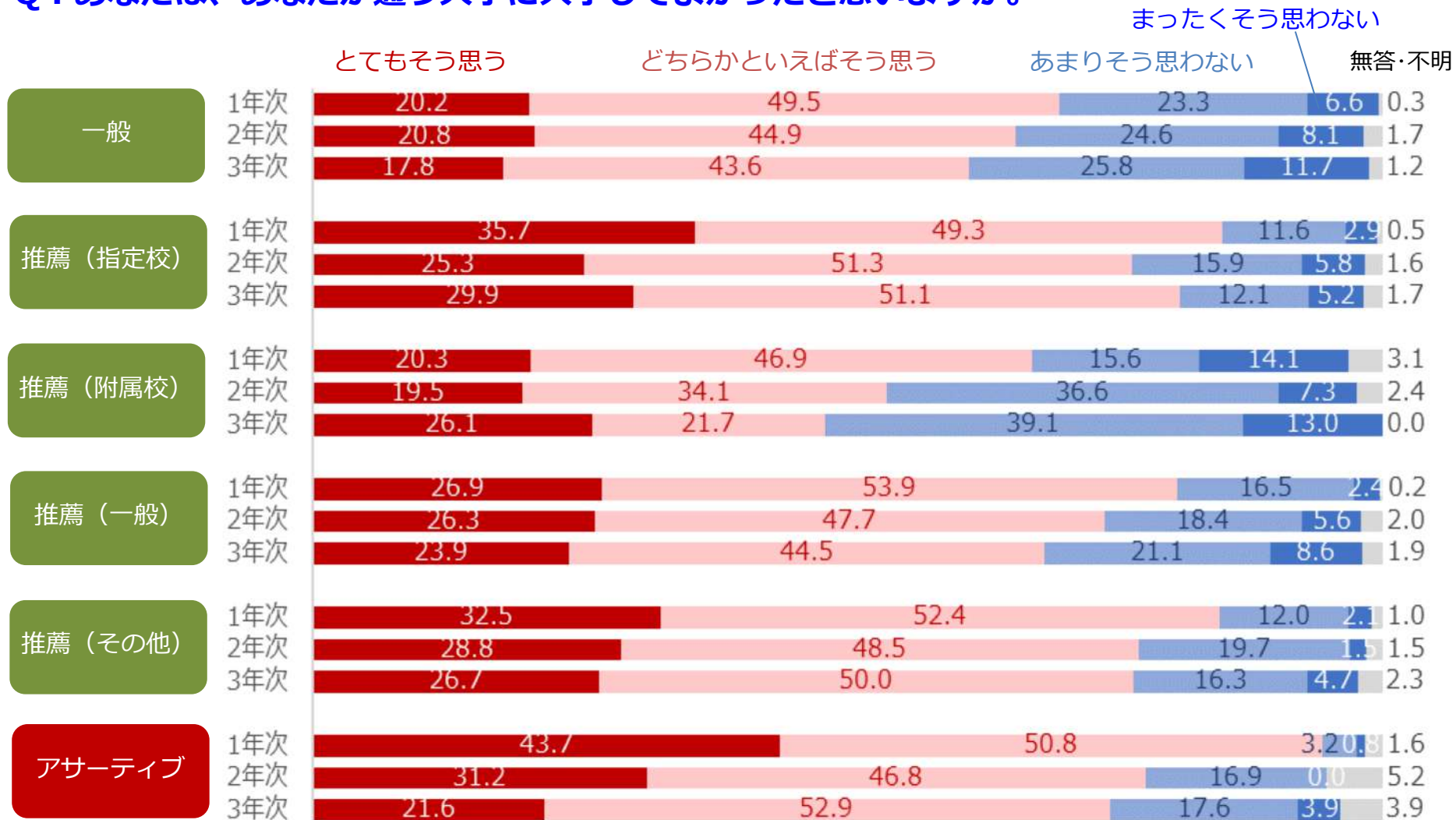
学内偏差値



* 「知的好奇心の高まり」「自己の客観視」「対人関係の成熟」「社会への関心」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

● 「とてもそう思う」が大きく減少

Q : あなたは、あなたが通う大学に入学してよかったですか。



1年次 p.<0.001、2年次 p.<0.05、3年次 p.<0.05(カイ二乗)

●アサーティブ生の変化の特徴

●積極的に評価できる点

- ①大学「第一志望」の多さ（1年次）
- ②学びに対する意識の高さ（1～3年次キープ）
- ③進路意識の高さ（1～3年次キープ）
- ④アセスメントの成績の上昇（2→3年次）
- ⑤自習時間の増加（1→3年次）
- ⑥読書冊数の増加（1→2年次）

良さの維持

課題の改善

●入学時の良さが弱まっている点

- ①大学納得度の低下（1→3年次）
- ②協調的問題解決力の低下（2→3年次）
- ③成長実感の低下（2→3年次）

良さの弱化

●アサーティブ入試の成果

学びに対する意識の高さ、進路意識の高さなど、入学時に現れていた良さをキープ。本入試がねらいとする学生の獲得に成功している。

●課題の改善

アセスメントの成績の上昇とともに、自習時間・読書冊数が増加するなど、学習行動面でも改善がみられる。

●新たに出現した課題

大学納得度の低下、入学後のイメージ低下など、エンゲージメントが弱くなり、成長実感が低下。入学後の学びをいかに充実させるかに課題が移行している。

★入学後の**学修ポートフォリオ**や、それを活用した**教育的な介入(面談など)**が重要に

PART2

個人の成績変化を用いた分析

- 以下の分析では、Wave 1 →3の成績の変化を変数にして、変化をもたらした要因を検討することで望ましい学修支援のあり方を考察する。

● 学内データと外部アセスメントの統合

学生個人のデータを蓄積する基盤をつくとともに、膨大に集まるデータを統合して分析する手法を開発する必要がある。

→データ蓄積と運用の基盤をどう作るか

→蓄積されたデータをどう分析するか（誰がどうやって?）

● 成長した学生の要因の解明

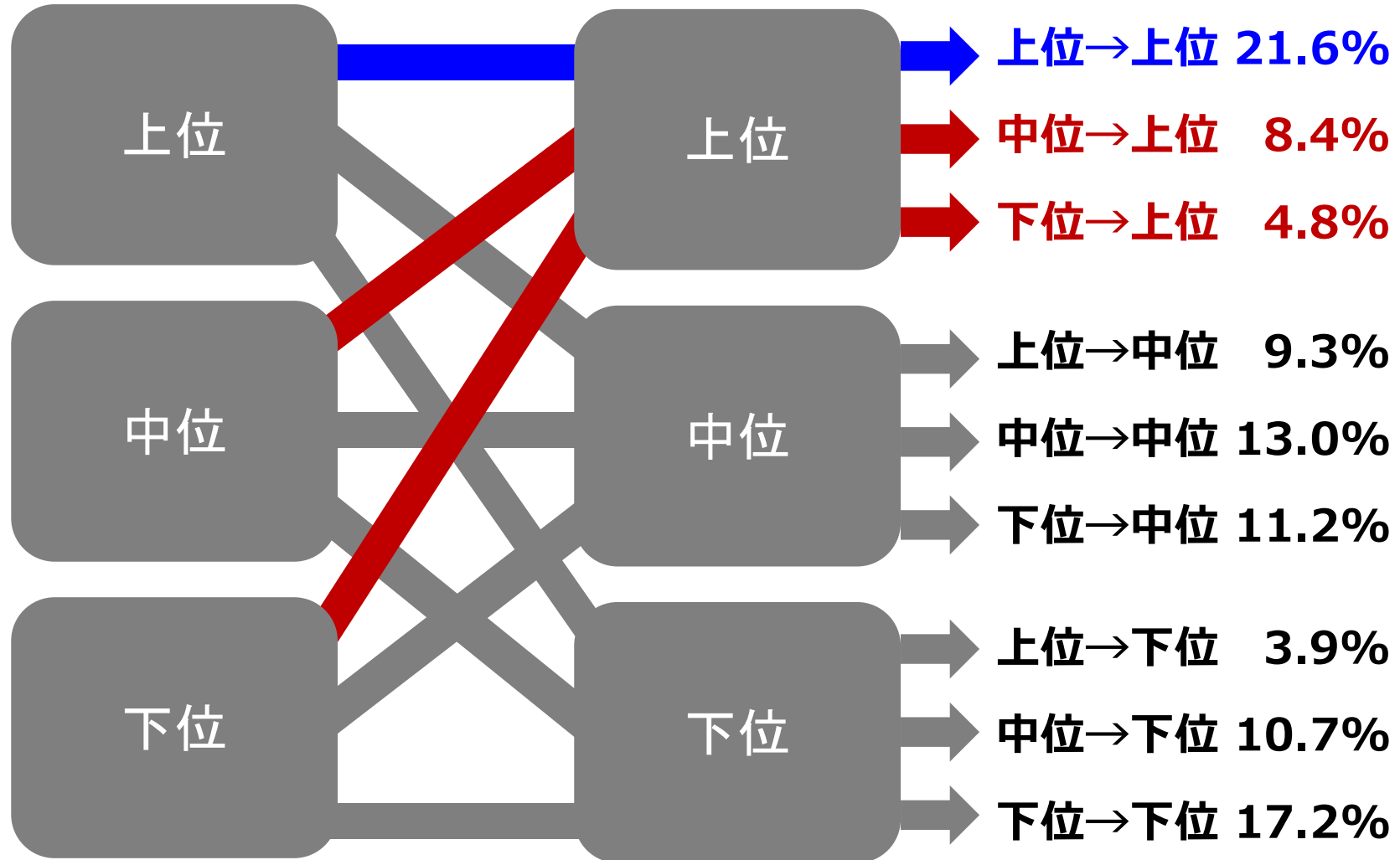
成長（変化）を従属変数にしたとき、何がその変化に影響を与えたのかが解明できる。

→成長をどうとらえるか

→施策の立案や評価にどう生かすか

1年次春

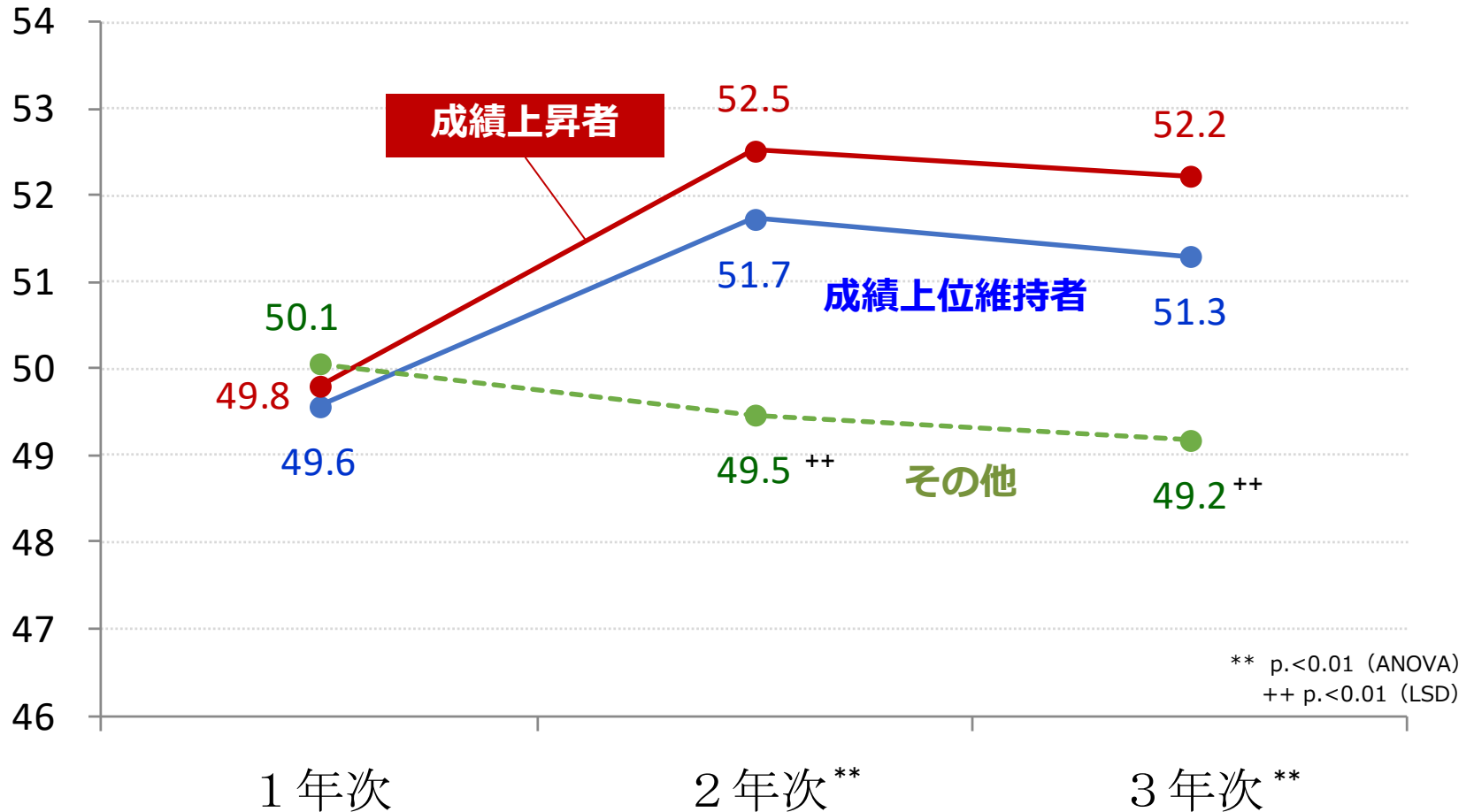
3年次春



①成績上位維持者、②成績上昇者、③その他に分けて、プロセスを検討。

● 成績上昇者は2年次以降、高いレベルの意識を保持

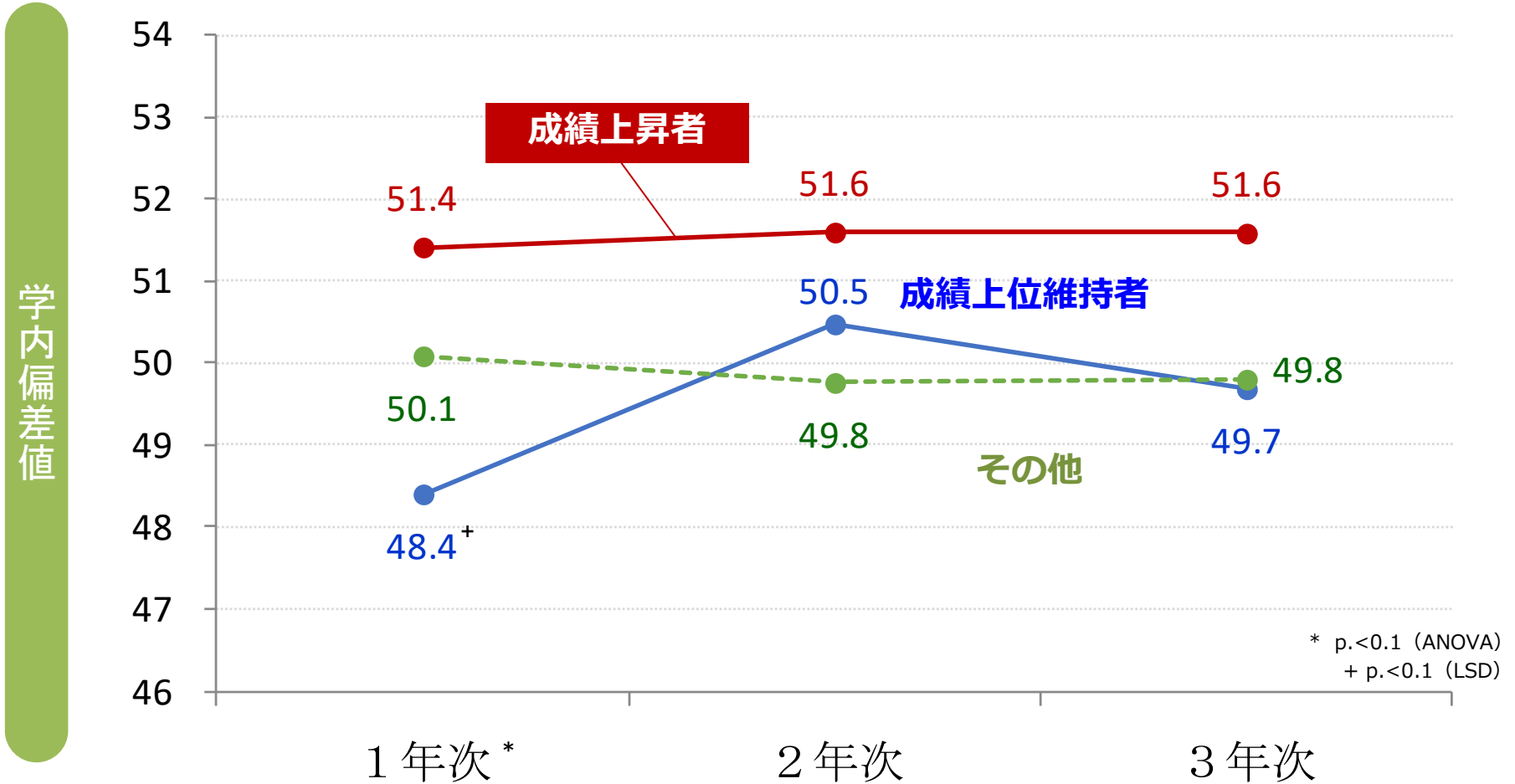
学内偏差値



* 「大学で学ぶ価値」「学びへのコミット」「学びへの心構え」「学びの見通し」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

* 多重比較 (LSD) は、「アサーティブ」との差の検定結果のみを示した。(次ページ以下同様)

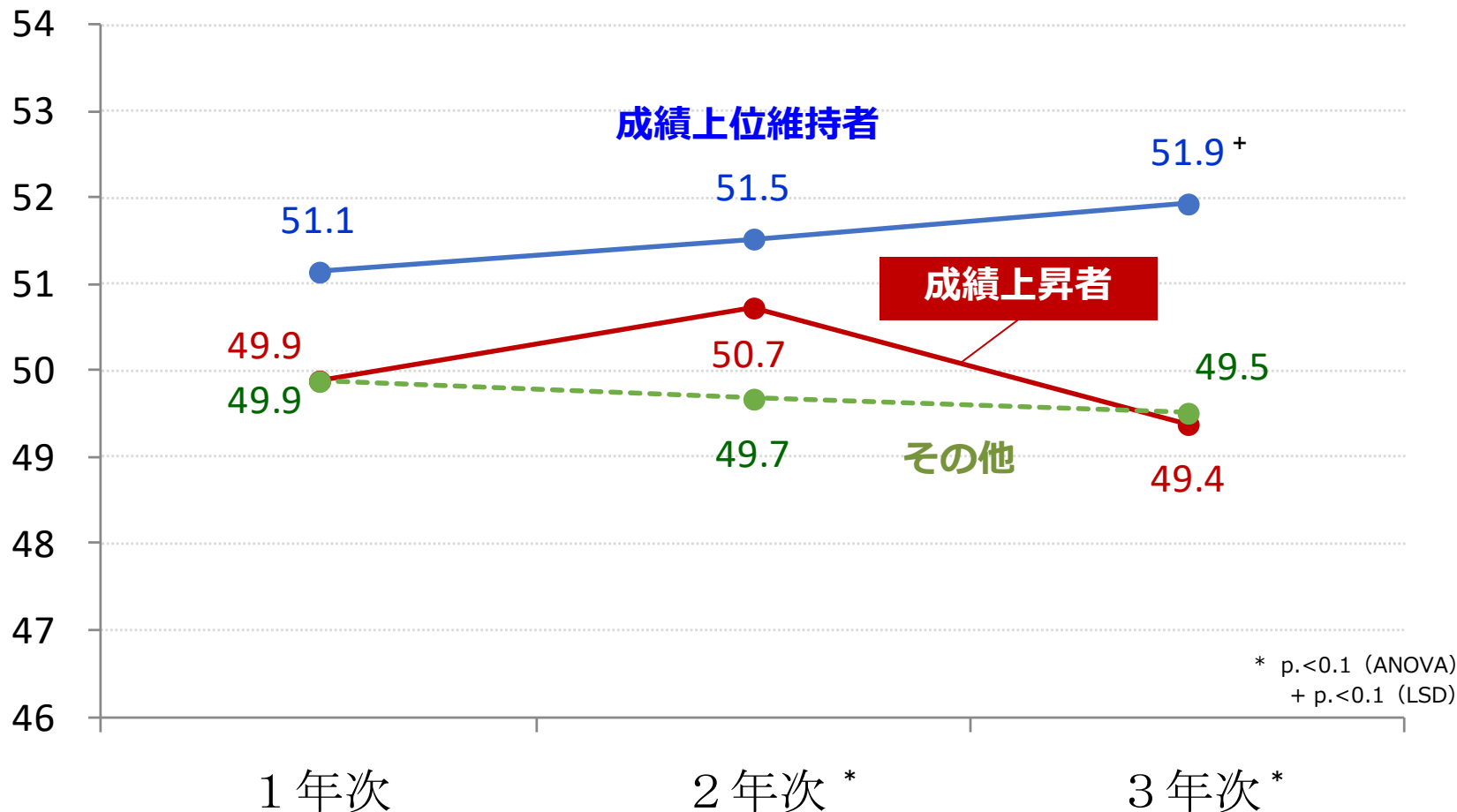
● 成績上昇者は入学時点から高い水準を維持



* 「自己理解」「社会理解」「進路の明確度」「進路実現に向けた行動」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

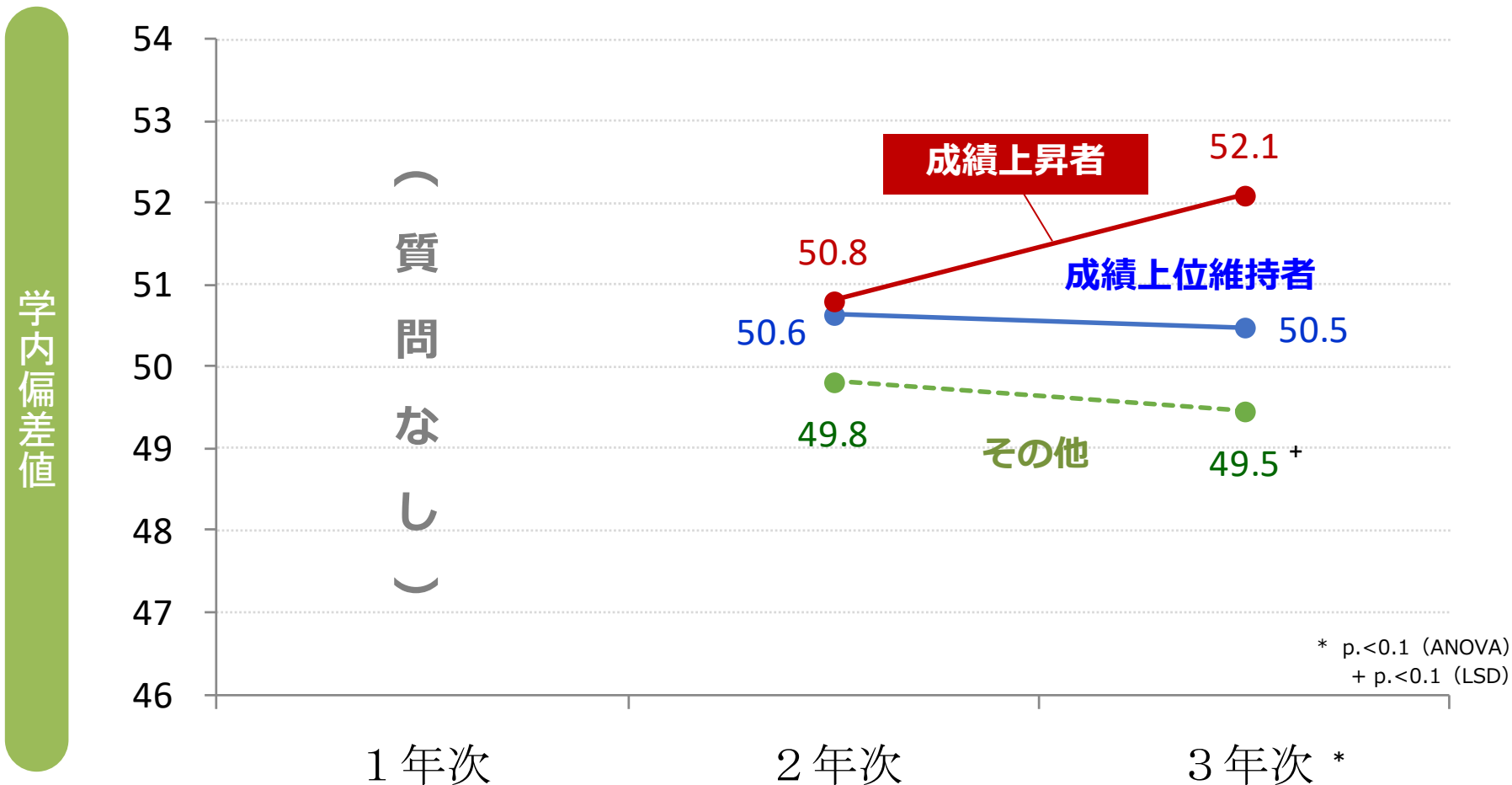
● 成績上昇者はそれほど高くなく、2→3年次に低下

学内偏差値



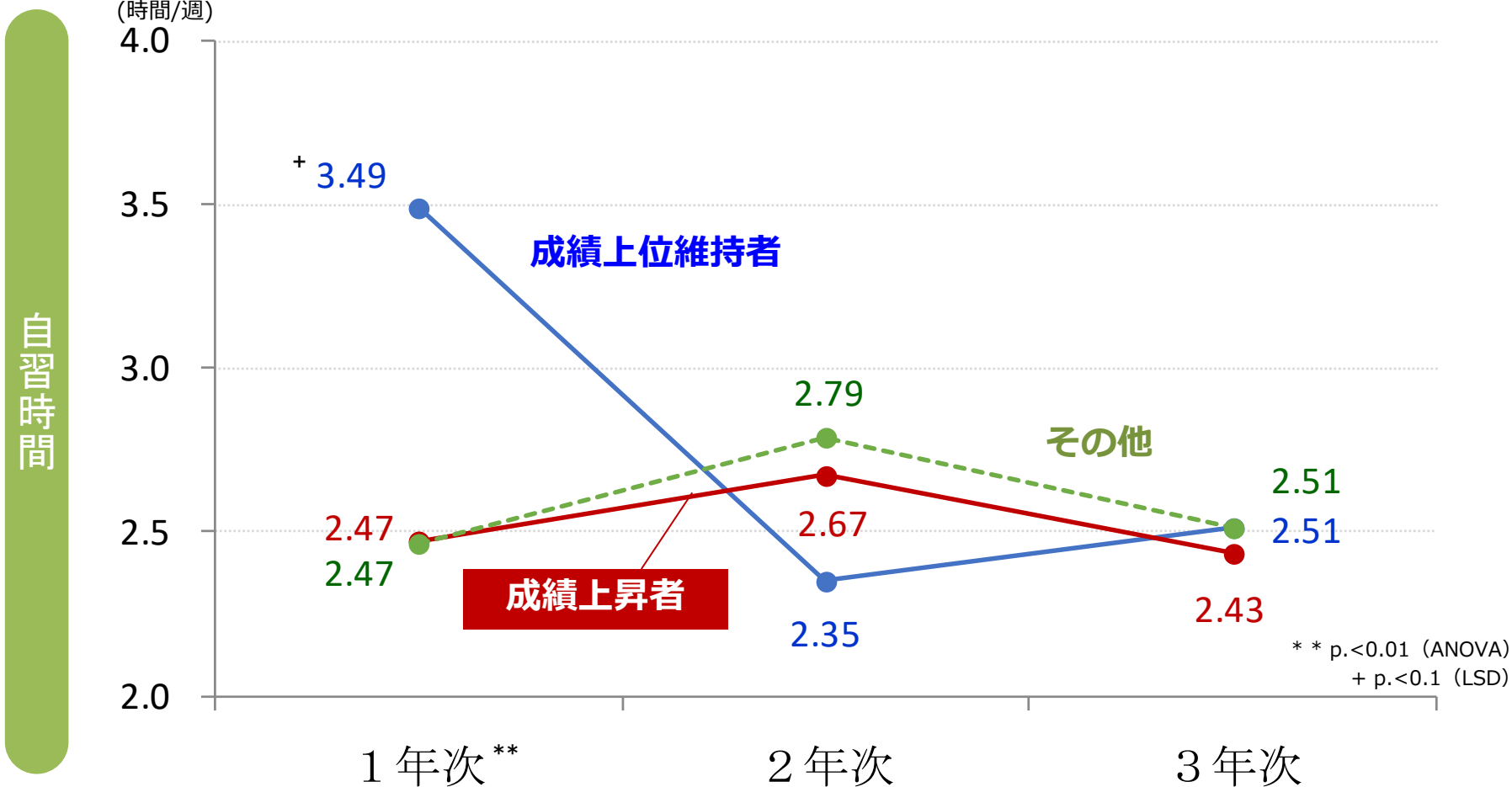
* 「挑戦する力」「続ける力」「ストレスに対処する力」「多様性を受容する力」「関係性を築く力」「議論する力」「課題を設定する力」「解決策の立案」「実証・検証する力」に関する27項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

● 成績上昇者は3年次に高い成長実感を得ている



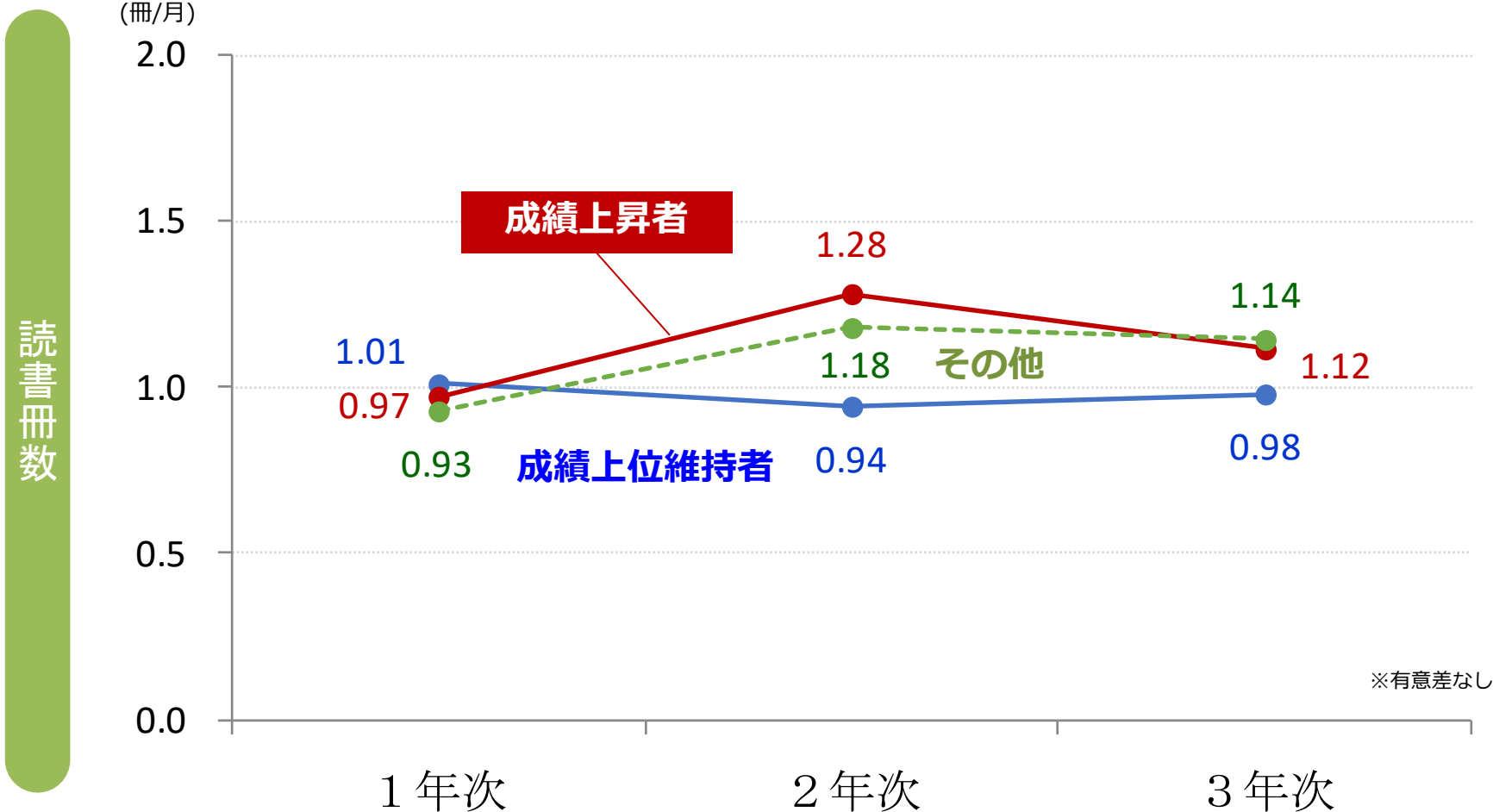
* 「知的好奇心の高まり」「自己の客観視」「対人関係の成熟」「社会への関心」に関する20項目の質問に対する回答を合計して得点化したのち、偏差値に換算した。

● 成績上昇者の自習時間は3年間ほぼ変わらず



* 週あたりの授業以外の自習時間について、「10時間以上」を15時間、「7～10時間」を8.5時間、「5～7時間」を6時間…のように数値に置き換えて、平均値を算出した。

● 読書冊数の差は小さく、ほぼ横ばいで推移



* 月当たりの読書冊数について、「4冊以上」を5冊、「2~3冊」を2.5冊、「1冊くらい」を1冊、「ほとんど読まない」を0冊に置き換えて、平均値を算出した。

① 成績変化について

- 1年春と3年春の成績に基づいて、「GPA上位維持者」21.6%、「GPA上昇者」13.2%、「その他」65.2%に分類。

② 成績上昇者の特徴について

- 成績上昇者は「**学びに対する意識**」の数値が高い。大学で学ぶ価値、学びへのコミット、学びへの心構え、学びの見通し、学びや経験に対する積極性は、「**成績上位維持者**」と同等か、それよりも高い。
- 成績上昇者は「**進路に対する意識・行動**」の数値が高い。自己理解、社会理解、進路の明確化、進路実現行動は、「**成績上位維持者**」よりも高い。
- **学修行動**（自主的な学習時間、読書冊数）は、3タイプとも**ほぼ同様**。

GPA上昇者は全体に、自習時間・読書では他の類型と大きな違いはないが、学びに対する意識、進路意識や行動が高い特徴が見られる。

★「高いパフォーマンスを挙げている学生」や「成長した学生」は誰かの分析から得られる示唆

- ①学内の成績を上げるには、学習意欲や進路意識を高めたり、自主的な学習をうながすことが重要である。



●学内の施策にどう生かし、成果を検証していくのか？

- ②学修行動が成績に影響を与えていないこと自体を検討する必要がある。

→学修行動そのものを評価の対象にしていない？

→学修において高い負荷を求めている？



●学修や評価のあり方としてそれでよいのか？